HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	初期キリスト教と聖書翻訳
Author(s)	戸田, 聡
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 150, 159(左)-199(左)
Issue Date	2016-12-15
DOI	10.14943/bgsl.150.l159
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/63892
Type	bulletin (article)
File Information	150_03_toda.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 150 (2016)

初期キリスト教と聖書翻訳*

戸　田　　聡

※本稿の成立をめぐる事情について

本稿は元来，聖書翻訳をめぐる或る書籍の企画の一章として構想・執筆されたものである。ところがその後，諸般の事情から同書籍が刊行されないこととなったため，取り扱いについて考慮した結果，紀要への投稿を思い立った次第である。上記企画の趣旨に沿って，内容が多分に概説的なものとなっていることはもとより明白だが，とはいえ，類似の書籍・論文にない内容を含んでもいると判断されるため，大幅な変更を加えないまま紀要への投稿に踏み切ることとしたことをお断わりしておきたい。(戸田)

はじめに
1．シリア語訳
2．コプト語訳
3．アルメニア語訳
4．グルジア語訳
5．エチオピア語訳
6．おわりに
── 聖書のアラビア語訳をめぐって ──

---

* 本稿で使用する略号は次のとおり。

ÄthF = Äthiopistische Forschungen

BBB = Bonner biblische Beiträge

Brock = S. Brock, *The Bible in the Syriac Tradition*, 2. rev. ed., Piscataway: Gorgias Press, 2006

CChr = Corpus Christianorum

CSCO = Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium

Ehrman & Holmes = B.D. Ehrman & M.W. Holmes (eds.), *The Text of the New Testament in Contemporary Research. Essays on the* Status Quaestionis, 2. ed., Leiden/Boston: Brill, 2014. 新約聖書の本文批判研究の現段階を示す概説書だと言ってよい。

PO = Patrologia Orientalis

StT = Studi e Testi

Zuurmond & Niccum = R. Zuurmond (revised by C. Niccum), "The Ethiopic Version of the New Testament", in: Ehrman & Holmes, pp. 231–252. 本論考については下記註 52 をも参照。

10.14943/bgsl.150.l159

はじめに

「それゆえに，あなたがたは行って，すべての国民を弟子と」せよ（マタイ28：19；口語訳）というイエス・キリストの言葉が福音書において伝承されていることからも窺われるように，キリスト教は成立の初めから宣教的宗教だったと言ってよい（どれほど宣教的だったかについては議論があるだろうが）。しかも「すべての国民」が宣教の対象となる以上，聖典である聖書が（さしあたりは旧約聖書が，しかしほどなく新約聖書も）翻訳されるに至ったのは，物事の自然な成り行きだったと言ってよいのかもしれない。しかしながら，宗教の中には例えばイスラム教のように聖典の翻訳を認めない宗教もあるので，話はそう単純ではないのかもしれない。

いずれにせよ，キリスト教の場合特に東方では，各地の現地語への聖書翻訳が行なわれた[1]。本稿が扱うのは，東方において伝承したそれら翻訳，より正確に言えば，東方キリスト教圏 Christian Orient において成立した，聖書の古代語訳である。しかしまず最初に，それら諸語への聖書翻訳を十全に扱えるだけの知識・能力を筆者は必ずしも持ち合わせていないということをお断わりしなければならない。例えばエチオピア語聖書については，ドイツのハンブルク大学の研究者などを中心として特に 1980 年代以降研究が進展し，その成果が Äthiopistische Forschungen という叢書その他で刊行されてきており，本稿でもそれらに若干触れはするが，それら研究の成果を筆者が十全にフォローできているわけでは決してない。また，アルメニア語聖書やグルジア語聖書については，当然それぞれの自国語たるアルメニア語及びグルジア語での研究が参照されねばならないが，筆者はそのために必要な能力（及び必要な研究文献）を持ち合わせていない。したがって，以下述べることは

[1] しかし西方（ラテン語的西方 Latin West）では，ラテン語を除く現地語への聖書翻訳は，古代から中世初期にかけてはゴート語訳を除けば（他のゲルマン語への翻訳であれ，ポエニ語訳であれ）一切行なわれておらず，この点で東方と西方が顕著な対照を成していることは注目に値しよう。

基本的に，近代西欧諸語で記されたいくつかの研究（或いは研究のまとめ・概説）などを参照して書かれた。それら研究はおもに，聖書の本文批判（textual criticism）との関係で，以下列挙する古代語訳の中に聖書本文の古い読み（正確に言えば，そのような古いギリシア語本文からの翻訳）が保存されている可能性に注目する，という観点からなされてきたものである。

以下，漠然と古さの順で各翻訳について見ていくことにする。「漠然と」などという曖昧な言い方をするのは，各言語の翻訳の成立年代が必ずしも分明でないからである。例えば，以下でまず扱うシリア語訳について言えば，その中の最古のもの（旧約聖書のシリア語訳のうちペシッタと呼ばれるもの，及び新約聖書のシリア語訳の最古のもの）は，本稿で扱う諸々の翻訳の中で最も古いであろうことがほぼ確実だが，しかしそれら翻訳が具体的にいつ頃成立したかが正確に確定できるわけでは必ずしもないのである。

1．シリア語訳

聖書の本文批判研究との関連という視角から聖書（正確には新約聖書）の古代語訳を扱った代表的な研究書の一つであるメッツガーの『新約聖書の初期の諸語版』[2] では，まず最初に当該言語圏へのキリスト教の伝播に関する略説があり，次いで当該言語圏における聖書の古代語訳に関する詳説が述べられている。宣教と翻訳の関係について冒頭で述べたことを考慮するなら，このような構成にはもちろん相当程度道理があると言えるが，本稿ではそのような行き方を採らないことにする。なぜなら，シリア語圏へのキリスト教の伝播に関して筆者がこれまでに多少とも行なってきた研究からすると，従来述べられてきたキリスト教の伝播の話（例えば使徒トマス伝承との関係など）には，信憑性が疑わしいとまで言わないとしても，相当程度留保が必要であり，留保付きのそのような議論を本論（聖書翻訳に関する記述）に先だつ前

[2] B.M. Metzger (ed.), *The Early Versions of the New Testament. Their Origin, Transmission, and Limitations*, Oxford: Clarendon Press, 1977.

段で行なうことは煩瑣にすぎると思われるからである[3]。

ところで，他の諸訳の場合と異なりシリア語訳の場合には，旧約聖書の翻訳と新約聖書の翻訳を少なくともいったんは区別する必要がある。なぜなら旧約聖書のシリア語訳（いわゆるペシッタ）については，旧約聖書の原語たるヘブル語からシリア語へ直接，翻訳が行なわれたとの理解が一般的だからである[4]。

そしてそのペシッタ（以下「ペシッタ」と言う場合，断わりのない限り旧約聖書シリア語訳を指す）についてはワイツマンの包括的な研究が 1999 年に公刊されており[5]，今や同書を参照せずに旧約聖書シリア語訳[6] について語る

---

[3] 例えば，ふつう同地域と関連が深いとされる使徒トマス伝承との関連でトマスによる福音書が引き合いに出されることが少なくなく，この言及の背景には，トマスによる福音書の著作原語がシリア語だとする理解があると考えられるが，私見によればトマスによる福音書の著作原語はギリシア語である可能性が高い。拙稿「トマスによる福音書をめぐる諸問題」，『聖書学論集』46（2014）（「聖書的宗教とその周辺　佐藤研教授・月本昭男教授・守屋彰夫教授献呈論文集」），697–715 頁を参照。したがって，トマスによる福音書を「シリア語圏と関連が深いとされる使徒トマス伝承」と結びつけるべき特段の理由はない。また私見によればそもそも「使徒トマス伝承」が果たしていつ頃から「シリア語圏と関連が深い」伝承とみなしうるかどうか（より正確に言えば，早い時代について果たしてそのようにみなしうるかどうか）についても再検討の必要がある。

[4] この点は，聖書のシリア語訳に関する標準的な概説書である Brock, p. 23 でも「［ペシッタの］翻訳者たちは基本的にみなヘブル語本文から作業をした The translators all worked basically from the Hebrew text」という言い方で確認されている。

[5] M.P. Weitzman, *The Syriac Version of the Old Testament. An Introduction* (University of Cambridge Oriental Publications, 56), Cambridge: Cambridge University Press, 1999. 1998 年に亡くなった著者の遺著として刊行された。なお，邦訳されたワイツマンの他の著作としては Ch・バーマント，M・ウァイツマン／矢島文夫監訳『エブラの発掘』（山本書店，1983 年）がある。

[6] 旧約聖書シリア語訳は批判校訂版でない形では以前から刊行されているが，20 世紀後半以降オランダのライデン大学のペシッタ研究所（Peshitta Institute）が主導して「Vetus Testamentum Syriace（以下 VTSyr と略称）」という叢書名のもと批判校訂版が出版社 E.J. Brill（1990 年代半ばからは Brill）によって順次刊行されてきた。ペシッタ研究所を中心とするこれら研究の成果は前註のワイツマンの研究でも活かされている。これまでに刊行された批判校訂版は以下のとおり。*Liber Genesis - Liber Exodi* (VTSyr, 1.1),

ことはできない。そこで以下ワイツマンの研究の内容を簡潔に紹介すると，ワイツマンはまず冒頭で，ペシッタがギリシア語からでなくヘブル語からの訳であることを述べ，旧約聖書シリア語訳を指す言葉としてのペシッタの原義が「単純な」である（したがって，例えばウルガタのように「普及した」といった意味ではない），といったことを確認している。そののち従前の研究を回顧し，そして，旧約聖書の諸文書のシリア語訳は同一の共同体内で行なわれたという理解を前提とした上で，翻訳テクニック（第 2 章，15–67 頁），旧約聖書のギリシア語訳（いわゆる七十人訳[7]）及びアラム語訳（いわゆるタ

1977; *Leviticus - Numeri - Deuteronomium - Iosue* (VTSyr, 1.2 & 2.1), 1991; *Liber Iob* (VTSyr, 2.1a), 1982; *Liber Judicum - Liber Samuelis* (VTSyr, 2.2), 1978; *Liber Psalmorum* (VTSyr, 2.3), 1980; *Liber Regum* (VTSyr, 2.4), 1976; *Proverbia - Sapientia Salomonis - Ecclesiastes - Canticum Canticorum* (VTSyr, 2.5), 1979; *Liber Isaiae* (VTSyr, 3.1), 1987; *Liber Ezechielis* (VTSyr, 3.3), 1985; *Dodekapropheton - Daniel-Bel-Draco* (VTSyr, 3.4), 1980; *Chronicles* (VTSyr, 4.2), 1998; *Apocalypsis Baruch - IV Ezrae* (VTSyr, 4.3), 1973; *Cantica (sive Odae) - Oratio Manasse - Psalmi apocryphi - Psalmi Salmonis - Tobit - I (III) Ezrae* (VTSyr, 4.6), 1972. なお付言すると，ライデン大学の上記ペシッタ研究所は 2014 年に廃止され，スタッフ・研究資源共にアムステルダム自由大学へと移籍した。自らライデン大学に在籍して学んだことのある者として，このような措置に及んだライデン大学の決定は，どういう理由によるのであれ，学問の立場から厳しく批判せざるをえない。

7 ここでは慣用に従って「七十人訳」Septuagint という言い方を使用した。しかしながら，ギリシア語版旧約聖書のうち厳密な意味で七十人訳という表現が適用可能なのは伝承上ではモーセ五書だけであること（もちろん，このこと自体は古くから周知である），いわゆる七十人訳の中には例えば kai ge といった特殊な用語法を使用した独特な（つまり，他のギリシア語版旧約聖書と区別可能な）ギリシア語訳が含まれていること，さらに，例えば Rahlfs 編として刊行されている『七十人訳』聖書の中には元来ギリシア語で書かれた（したがってギリシア語訳でない）マカベア書のような文書が含まれていること，などに鑑みて，ギリシア語版旧約聖書の総称として「七十人訳」という語を使うのは適当でない，という議論を最近例えば，旧約聖書シリア語訳の研究などで知られる研究者Ｐ・Ｊ・ウィリアムズが行なっている（筆者はこの議論をウィリアムズの講演 “Why I Don’t Believe in the Septuagint” https://www.youtube.com/watch?v＝vmA2oQmr4wQ で聞き及んだ）。そして筆者自身も，この議論は妥当だ（したがって，「七十人訳」という語の使用は基本的に回避されるべきである）と考えていることを，ここで付け加

ルグム）との関係如何（第 3 章，68-163 頁），様々な旧約文書のシリア語訳の一貫性の如何（第 4 章，164-205 頁），ペシッタの本文の確立（第 6 章，263-308 頁。このあと続いて補遺 Appendix が 4 つある）といった諸点について議論を行なっている。章立てについてのこの紹介からすると，一見したところワイツマンの議論は，（ペシッタはギリシア語からでなくヘブル語からの訳である，ペシッタは同一の共同体内での翻訳によって成立した，といった）仮説ないし前提の上に立脚した仮説的議論の枠内にとどまった議論（つまり循環論法）のように見えるかもしれないが，実際には，そういった仮説ないし前提にかかわる議論を具体的な論拠を挙げて各章で行なうことによって，それら仮説ないし前提の裏づけが行なわれていると理解することができる（例えば，同一の共同体内による翻訳という論点については，第 4 章の議論が或る程度の裏づけを提供していると理解することができる）。その際ワイツマンは polygenesis という概念を言わばキー概念として再三用いている。polygenesis とは，同じ（或いは類似の）現象が複数の場所・機会で見られる場合に，それらが互いに無関係な独立した形で生じていることを指し，そし

えておきたい。

さらに言えば，実はこの註で繰り返し使っている「ギリシア語版旧約聖書」という言い方も必ずしも問題なしとしない。なぜなら，「旧約聖書」という言い方はもとより無論キリスト教の観点からする言い方であり，しかも正典としての旧約聖書が既に確定しているかのごとき感を与える表現だと言えるが，例えば，紀元後 2 世紀にアクィラやシュンマコスによってユダヤ教聖書のギリシア語訳が新たに行なわれた時に，それ以前に流布していた（そして，のちにはキリスト教によって旧約聖書として専有されるに至った）ユダヤ教聖書ギリシア語訳について，どれほどその範囲・内容が確定していたと言えるか（後者の「内容」に即して言えば，同一の旧約文書についてギリシア語訳が複数存在するケースもあったと考えられるので，その場合どの翻訳が定評のある翻訳だったか，等），という問題に答えることは，決して容易でないと思われるからである。

しかし「ギリシア語版ユダヤ教聖書」Greek Jewish Scripture という言い方では，今出てきたアクィラ訳やシュンマコス訳を直ちには排除できず，しかも，この言い方を使ったところで範囲・内容の確定という問題が解決できるわけでもないので，他のより適切な表現が少なくとも管見の限りでは見当たらない現状においては，ギリシア語版旧約聖書（Greek Old Testament）という言い方は許容せざるをえないと思われる。

て例えば69頁の議論に見られるように，ペシッタとギリシア語旧約聖書との関係を主張する議論の論拠の多くは，両者の関係によるというよりむしろpolygenesisによって説明されるほうが妥当である，といった仕方でこの概念は使用されている。

ワイツマンの議論の中で本稿の視角から見て特に注目すべきは，もちろん，ペシッタの成立の史的背景について論じた第5章(206-262頁)である。以下，若干立ち入ってその議論を紹介するが，全体としてワイツマンの議論は，旧約聖書のシリア語訳を生み出した共同体に関する画像をなるべく詳細に描きつつ，いかなる立場がその画像と最も整合的かをまず論じ（先取りして言えば，非ラビ的なユダヤ教が最も整合的だというのがワイツマンの結論である），次いで成立地及び成立年代を論じる，という構成になっている。

ワイツマンはまず，シリア語訳者が不完全なヘブル語底本に基づいて翻訳作業を行なわざるをえなかったため他の諸書（の翻訳）の場合よりも多く自らの考え・立場について関説しているということで知られるシリア語訳歴代誌に注目し，同書から浮かび上がる人物ないし共同体の画像を描き出している（208-216頁)。それによると歴代誌訳者（或いはその訳者によって代表される共同体）は，歴代誌中のユダヤ人の受難に自らを重ね合わているところから明らかなように，自らをユダヤ人と同定していると言ってよく，しかしその上で言えば，ハラカに対する無関心や独身の賞揚など，ラビ的ユダヤ教と相容れない立場をとっている。また祈禱については，この歴代誌訳者は第3時，第6時，第9時といった一日の特定の時間を祈禱の時間としており（最初期のキリスト教，すなわちユダヤ教の一派も，これらの時間を祈禱の時間としていた），この点でもラビ的ユダヤ教と区別されるという。

そしてワイツマンによれば，以上歴代誌について見てきた諸点は，自らをユダヤ人と同定するという1点を除けば，他の旧約文書のシリア語訳にも確認できるという（216-226頁)。これに対してユダヤ人との同定という点に関しては，歴代誌以外の諸文書では様々なニュアンスがあり，多くの箇所については「翻訳者たちは，自分自身をユダヤ人自体と同定するよりむしろ，選ばれた小共同体だと自らをみなしていた」(229頁）という解釈が可能だ，と

ワイツマンは述べる。そのことは民としてのユダヤ人に対する否定的な評価につながり，そしてその否定的な評価の裏返しとして，諸国民に対する高い評価が様々な箇所に見られる，と（231 頁）。

しかも，ヘブル語聖書のアラム語訳であるタルグム ── シリア語はアラム語の一方言なので，実はペシッタもヘブル語聖書のアラム語訳の一つと称しうる ── は，確かにラビ的ユダヤ教によって保存・伝承されてきたが，しかし元来ラビたち自身は，ヘブル語聖書を原典のヘブル語で学んでおりタルグムなど必要としておらず（タルグムは，ヘブル語を理解しない大衆のために作られた言わば妥協の産物である），つまりタルグム(或いはそれに類する試み）は必ずしもラビ的ユダヤ教に限られない，と考えることができる。さらに，ペシッタがいわゆるその他諸書（ケトゥビーム）を含むということは，これら諸書のタルグム（すなわちアラム語訳）が中世に至るまで長い間欠如していたことと合わせて考えると，むしろペシッタがラビ的ユダヤ教の産物でないことを示唆している，とワイツマンは論じている（234-237 頁）。そしてさらに，ペシッタがラビ的ユダヤ教に淵源することを示唆すると従来考えられてきた論拠を批判的に検討したのち（237-240 頁），ワイツマンは次に，キリスト教共同体の中でペシッタが作り出されたとする議論の論拠を検討して，確かにそれら論拠の箇所はキリスト教的な文脈と整合的たりうるが，決定的にキリスト教的だとは言えないとしている（243 頁）。そしてペシッタのキリスト教的起源に対する反証としてワイツマンは，上述のように歴代誌訳者が自らをユダヤ人と同定していること（同様の同定はエズラ記のシリア語訳者についても言える由）を決定的とみなしているようである（244 頁）。かくてワイツマンは，ペシッタを生み出したのは非ラビ的ユダヤ教の共同体だろう，と結論づけている。

そしてペシッタの成立地に関しては，以上の議論と合致する場所としてエデッサを挙げて,「翻訳者たちがギリシア語もヘブル語も知っていたという事実は，エデッサを成立地とすることと良く合致する」(247 頁)と述べている。

ペシッタの成立年代についてワイツマンは，往々最古のシリア語版新約聖書とされるディアテッサロン（ディアテッサロンについては後述を参照）の

中にペシッタからの引用が見られることに注目し，この点を手がかりに「ディアテッサロンの成立年代と推定される 170 年ごろまでにはペシッタ（より正確にはその中のモーセ五書や詩篇など）は権威ある地位を占めるに至っていた」と論じるＪ・ヨーステンの研究[8] を引き合いに出すなどして (253 頁)，「ペシッタ中の旧約文書の大半の成立年代は紀元後 150 年ごろ，エズラ記及び年代記は 200 年ごろと定められる」(261 頁) と論じている。そして，もともと非ラビ的なユダヤ教の中で成立したはずのペシッタがキリスト教によって専有されるようになり，ユダヤ教から拒絶されるようになる過程について，ワイツマンは自らの推測を述べている（258-262 頁。ここでは詳細は略)。

以上見てきたところから明らかなように，*An Introduction* と銘打たれたワイツマンのこの著作は単なる概説どころではなく，著者の創見が随所に盛り込まれた意欲的な研究書だと言うことができ，同書のそのような性格に応じて，書評がいくつか学術雑誌上で発表されている。このうち，世界的なシリア学者であるＳ・ブロックによる書評[9] はほぼベタ褒めと言ってよく，ブロック自身が為しえなかった困難な課題への取り組みが評価されたものと思われる。次に，シリア学の専門誌である *Hugoye* に発表されたＤ・Ｊ・レインの書評[10] では，評者レインはワイツマンの主張を 7 点（ペシッタとマソラ本文との関係，ギリシア語旧約聖書との関係，タルグムとの関係，翻訳が一つの共同体によって担われたか否か，翻訳成立の理由，原ペシッタを想定することの有意味性の如何，マソラ本文との違いはヘブル語底本の違いによるのかそれとも翻訳テクニックに由来する差異か，の 7 点）に整理し直し，その上

---

[8] J. Joosten, “The Old Testament Quotations in the Old Syriac and Peshitta Gospels. A Contribution to the Study of the Diatessaron”, *Textus* 15 (1990), pp. 55-76. イスラエルのヘブライ大学の Web サイト（http://www.hum.huji.ac.il/units.php?cat＝5003&incat＝4972）で閲覧可能（2015 年 7 月 23 日閲覧)。

[9] S. Brock, *Church History* 69 (2000), pp. 404-406.

[10] D.J. Lane, *Hugoye* 3.2 (2001). http://www.bethmardutho.org/index.php/hugoye/volume-index/224.html で閲覧可能（2015 年 7 月 1 日閲覧)。*Hugoye* はオンライン・ジャーナルであり，所収の論考には頁数の表記がない。

でレイン自身は，エデッサをペシッタの成立地とする点など，大部分の点についてワイツマンの主張に同意するが，非ラビ的ユダヤ教の共同体がシリア語訳を行なったとするワイツマンの主張にはなお違和感を述べ，エデッサのキリスト教共同体はワイツマンが考えるよりも多様・複雑だったと指摘している。学術雑誌に掲載された書評ではこのように概ね，重要な貢献であり今後の研究・議論の出発点と位置づけられる，といった評価がワイツマンの本書には与えられていると言えよう[11]。

同書に対する最も詳細な論評を発表したのは，かつて自らの学位論文のテーマとして出エジプト記のペシッタを詳しく研究したM・D・コスターである[12]。コスターもまた，ワイツマンの本書を高く評価するとしてまずその内容を要約しているが，しかしながら彼は「出エジプト記のペシッタ本文［の批判校訂版］の用意のための写本校合の結果についての，どちらかと言えばいい加減な提示の仕方（casual presentation）に対しては深刻な異議がある」（225 頁）と述べ，以後ほぼ論文の末尾に至るまで，種々の写本を引き合いに出しつつシリア語版旧約聖書の本文校訂上の問題をあれこれ論じている。ここでコスターが行なっている批判はまさに厳密に本文批評（textual criticism）にかかわる議論と言ってよく，その内容はあまりに専門的なので本稿での紹介は割愛するほかないが，あえて下司の勘繰り的な推察を述べれば，コスターは，自らの研究が明らかにしたこと（彼はこれを「旧約聖書の大部

---

[11] その他に筆者が参照しえた書評に短く触れると，P.J. Williams, *Journal of Royal Asiatic Society* 3rd. Ser. 10 (2000), pp. 85–88 は，本書を全般的に高く評価しており，内容を要約したあと，細かい解釈をめぐっていくつかワイツマンと異なる見解を述べる程度にとどまっている。次に T.L. Holm, *Journal of Near Eastern Studies* 62 (2003), pp. 227–229 は，やはり本書を全般的に高く評価するが，ユダヤ教の共同体がペシッタを生み出したとするワイツマンの主張に対して，そうでない可能性（例えばキリスト教の共同体だった可能性）もある，と指摘するなどしている。

[12] M.D. Koster, “A New Introduction to the Peshitta of the Old Testament”, *Aramaic Studies* 1 (2003), pp. 211–246。Koster 自身の学位論文の書誌情報は次のとおり。M.D. Koster, *The Peshiṭta of Exodus. The Development of its Text in the Course of Fifteen Centuries*, Assen/Amsterdam: Van Gorcum, 1977.

分の文書におけるペシッタ本文の伝承の主流の展開の基本的パターンを明らかにしたものだ」（同 225 頁）と主張している）をワイツマンが無視し，ないしあまりにも簡潔に取り扱っていることに対する抗議として，縷々議論を行なっているようである。

次にペシッタ以外の旧約聖書シリア語訳について，ブロックによる概説に従って述べると[13]，6 世紀前半のシリア語キリスト教神学者マッブグのフィロクセノスの委嘱によってイザヤ書などいくつかの旧約文書がギリシア語からシリア語に翻訳されたらしく，その痕跡が今日残っている。また，7 世紀初頭にテッラーのパウロスというシリア語キリスト教の学者がアレクサンドリア或いはその近郊に於いてやはりギリシア語からシリア語に聖書を翻訳しており，オリゲネスのヘクサプラに含まれるギリシア語本文を底本としているこの翻訳は研究者の間で「シリア・ヘクサプラ Syro-hexapla」訳と称されている。さらに，同じくシリア語キリスト教の学者として著名なエデッサのヤコブ（708 年没）が，ギリシア語旧約聖書及びペシッタを基に作業して，いくつかの旧約文書のシリア語訳を改訂したとのことである。

次に新約聖書のシリア語訳について，やはりブロックの概説[14] を参照しつつまず通説を述べると，シリア語新約聖書の端緒として挙げられるのは，2 世紀後半に活動したキリスト教著作家タティアノスの編纂になる「ディアテッサロン」（直訳は「4 つを通して」）である。このディアテッサロンは，当時既に個々別々に知られていたと思われるマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの 4 福音書を一つの連続した福音書へと編み上げた，調和福音書 Gospel Harmony とでも言うべきものである。ブロックによるとディアテッサロンの著作原語はギリシア語かシリア語か不明だが，その痕跡はキリスト教的東方にもキリスト教的西方にも見られ，そして 5 世紀初頭に至るまでこのディアテッサロン（のシリア語版）が権威ある本文として流布してきたが，5 世紀初頭に新たなシリア語訳新約聖書が成立すると，ディアテッサロンは使用

[13] Brock, pp. 17–29.

[14] Ibid., pp. 18–19, 31–37.

されなくなっていった。代わって流布したこの新たなシリア語訳新約聖書はこれまたペシッタと呼ばれる（この言い方からわかるように今日では，シリア語聖書の中で最も流布した版が，旧約聖書であれ新約聖書であれペシッタと呼ばれている）。さらに，新約聖書ペシッタが流布する以前に福音書の古シリア語訳 Old Syriac（Vetus Syra とも呼ばれる）も存在し ── この古シリア語訳は，4 福音書の各々が別々のままで（つまり調和させられずに）収録されていることから，調和福音書 Evangelion da-Mehalleteであるディアテッサロンとの対比で分離福音書 Evangelion da-Mepharresheと称されることもある ──，ペシッタはこの古シリア語訳の改訂によって成立したと考えられている。Curetonianus 及び Sinaiticus と各々称される 2 つの写本が伝えるこの古シリア語訳の成立年代については，2 世紀末から 4 世紀初頭まで諸説があり今なおはっきりしないが，ディアテッサロンよりあとに成立したとふつう考えられている（ディアテッサロンより先に成立したと考える学者もいるが，少数派である）。そののち 6 世紀初頭には，上述のマッブグのフィロクセノスの委嘱によって新約聖書ペシッタの改訂という形でシリア語訳新約聖書が作成され（フィロクセノス版），さらに 7 世紀初頭には，上述したテッラーのパウロスと同じ修道院にいたハルケルのトマスがパウロスによる旧約聖書のシリア語訳と同時期に新約聖書シリア語訳を作成し，616 年にこれを完成させた（ハルケル版）。フィロクセノス版は現存しないが，フィロクセノスによる福音書註解の中で多くの引用によって保存されている。これに対してハルケル版は，例えばギリシア語の小辞をすべて翻訳に反映させるなどといった点に特徴があり，多くの写本によって保存され，とりわけ典礼の際に読まれる聖書抜粋を収めた典礼書の作成に当たっては，新約聖書ペシッタよりむしろしばしばハルケル版が使われたとのことである。

但し，以上見てきたブロックの概説のうち，タティアノス編纂のディアテッサロンに関する記述については筆者は様々な点で見解を異にする[15]。具体的

[15] 以下で述べる私見は，拙稿「巨大な地下迷宮？ ── タティアノスのディアテッサロンをめぐって ──」，『聖書学論集』41（2009）（「経験としての聖書　大貫隆教授献呈論文集」），

に言えば，ブロック自身は著作原語は不明だとするが，私見によれば明らかにギリシア語である。そして，ディアテッサロンとの関連でよく引き合いに出される 170 年という年代は，タティアノス自身がディアテッサロンを編纂したと推定される年代であり，したがって，上述のヨーステンの議論（これは上述したワイツマンの議論の根拠ともなっている）のようにシリア語ディアテッサロンの成立年代として 170 年という数字を出すのは正しくない。シリア語ディアテッサロンの成立年代はむしろ 3 世紀初頭以降である可能性も否定できない。そしてそうだとすると，このことはシリア語訳旧約聖書の成立年代に関する上述のワイツマンの議論にまで影響を及ぼすことになる。

かくて私見によれば，聖書のシリア語訳をめぐっては，旧約聖書についても新約聖書についても未解決の部分が残っていると考えるのが妥当である。

最後に，シリア語聖書における正典（canon）の問題について一言しておきたい。或る事典の項目記述によると[16]，まず旧約聖書に関しては，シリア語の聖書写本の任意の一巻は通常，旧約文書の一書ないしひとまとまり（例えばモーセ五書）しか収録しておらず，紀元後の最初の千年紀においてはシリア語聖書の旧約正典も旧約聖書の配列も確定していなかったと見られる，とのことである。そして比較的早い時代においては，歴代誌，エズラ記－ネヘミヤ記，エステル記，ヨブ記，雅歌が正典に含まれていなかった可能性があるが，正典について列挙している表が存在する場合には，その表には，歴代誌など今しがた列挙された文書も記載されているという。他方，いわゆる第二正典（新共同訳で言うところの「旧約聖書続編」）に含められる文書のうちどれがそのような言わば「正典表」において言及されているかは，当の表の如何でまちまちだという。次に新約聖書に関しては， 5 世紀のエデッサの主教

501-529 頁で展開した。なお，同拙稿で依拠した諸論考の著者であるU・B・シュミドによる，ディアテッサロンに関する最新の研究状況の概観として U.B. Schmid, “The Diatessaron of Tatian”, in: Ehrman & Holmes, pp. 115-142 がある。

[16] R.B. ter Haar Romeny, art. “Bible (General)”, in: S.P. Brock et al. (eds.), *Gorgias Encyclopedic Dictionary of the Syriac Heritage*, Piscataway: Gorgias Press, 2011, p. 76.

ラッブーラーの時代には新約聖書ペシッタは公同書簡のうち第二ペテロ，第二・第三ヨハネ，ユダ，黙示録を含んでおらず，これらが最初に翻訳されたのは六世紀，たぶんフィロクセノス版においてであり，ハルケル版でもこれらは翻訳されている（つまり新約正典に含められている）。

2．コプト語訳

エジプトにおけるキリスト教の最初期の宣教については，不明な点が多く，また本稿の上述のような方針もあるため，ここでは特に言及しない[17]。

シリア語訳と同様，聖書のコプト語訳も早い時代に行なわれた翻訳だと「漠然と」考えられている。そして実際，何らかの形で（つまり口頭での翻訳を含めて）聖書が早い時代にエジプトの現地語へと翻訳されていたこと自体は間違いなく，その証拠として例えば，最初期の修道者の一人として有名なアントニオス（356 年に高齢で死亡）という，ギリシア語を解しない人物が，たぶん 3 世紀後半のいずれかの時期に聖書の言葉を聞いて回心し，それがエジプトにおける修道制の興隆と結びついた，ということがしばしば挙げられる[18]。つまり，回心の際アントニオスは聖書のエジプト語訳を耳にしていただろうというわけである。但しこのエピソード自体は，アントニオスの時代に聖書のコプト語訳が文書として存在したことの証拠では必ずしもない。

複数の方言の存在が知られるコプト語の中で最初に文学語としての地位を

---

[17] 拙著『キリスト教修道制の成立』（創文社，2008 年）の第 1 部第 6 章ではエジプトにおけるキリスト教の宣教について扱ったが，同章のもととなった論文は 1990 年代後半に公刊したものであり，今ではやや古くなっている面があることが否めない。人名から宣教の程度を推測するという，同論文で肯定的に評価した方法については，最近それを再検討して（拙論文と同様に）肯定的に評価する論文が公刊されている（M. Depauw & W. Clarysse, “How Christian was Fourth-Century Egypt? Onomastic Perspectives on Conversion”, *Vigiliae Christianae* 67 (2013), pp. 407-435）。

[18] アントニオスの回心については『アントニオス伝』二章を参照。

確立した方言はサイド方言だと通常考えられており[19]，そのような時代が数世紀間続いたのち，７世紀にエジプトがイスラム教勢力の支配下に入った以降，サイド方言に代わってボハイル方言が文学語としての地位を確立したとされるが，こと聖書に関しては，サイド方言訳もボハイル方言訳も早くから存在したと従来考えられてきた。具体的には，サイド方言に関してはＨ・クヴェッケが校訂した一連の福音書群が[20]，ボハイル方言に関してはＲ・カッセルが校訂したヨハネによる福音書（部分）が[21]，それぞれ早い時代の翻訳の例だと言える。

最近アスケランドの研究が刊行された[22]。同書は，ヨハネによる福音書に限定しつつ，現存する様々なコプト語方言訳を比較しており，コプト語訳聖書（正確には新約聖書）を包括的に論じた書だと言える。同書はギリシア語新約聖書本文研究への貢献を主眼としており，本稿とは視角を異にするが，それでも本稿の観点から見て参照に値する言及を種々含んでいる[23]。

---

[19] 但し，ナグ・ハマディ写本（リュコポリス方言の影響を受けたサイド方言で書かれたと評しうる文書もあれば，『真理の福音』のように全くリュコポリス方言で書かれたと評すべき文書もある）を考慮に入れた場合，同写本の成立年代（及び，同写本が収録しているコプト語版諸文書の成立年代）をどう考えるかによっては，何方言がコプト語最古の文学語だと言えるかという点の理解が，異なってくる可能性がある。

[20] H. Quecke (ed.), *Das Markusevangelium saïdisch*, Barcelona: Papyrologica Castroctaviana, 1972; Id. (ed.), *Das Lukasevangelium saïdisch*, Barcelona: Papyrologica Castroctaviana, 1977; Id. (ed.), *Das Johannesevangelium saïdisch*, Barcelona: Papyrologica Castroctaviana, 1984.

[21] R. Kasser (ed.), *Papyrus Bodmer III. Evangile de Jean et Genèse I–IV,2 en bohaïrique* (CSCO, 177), Louvain: Secrétariat du CSCO, 1971.

[22] C. Askeland, *John's Gospel. The Coptic Translations of its Greek Text* (Arbeiten zur neutestamentlichen Textforschung, 44), Berlin/Boston: De Gruyter, 2012. 著者がケンブリッジ大学に 2011 年に提出した学位論文が基になっているとのこと。

[23] なお，上掲註 19 及びその本文で触れた点にかかわるが，アスケランドが同書においてサイド方言自体について述べていることは極めて抑制的であり，慎重な言い方にとどまっている。以下，サイド方言にも触れる形で同書のまとめで述べられているアスケランドの言葉をそのまま訳出しておくと(255 頁)，「コプト語の聖書翻訳はエジプトのキリスト教化の過程で登場したに相違ない。どうやら，コプト語新約聖書は，及びたぶん旧約聖

具体的に，本稿の視角から見て同書中で重要なのは，サイド方言版以外の諸方言版について概観した第 5 章（サイド方言版については同書の第 1 ～ 4 章で詳述されている）と，それら諸方言版の相互関係を論じた第 6 章であり，特に第 6 章の結論部（251-252 頁）が注目に値する。それによると，まずリュコポリス方言版のヨハネ伝は「限定的な編集的活動を伴ったところの，サイド方言版の置き換え（transposition）」だという（251 頁）。このような理解を支持する最も重要な根拠として，サイド方言版とリュコポリス方言版の間の「重要な一致（significant agreement）」（他の諸版と異なる読みが基本的にサイド方言版とリュコポリス方言版の間でのみ共有されている，というたぐいの一致）が 197-203 頁で列挙されている。但し，リュコポリス方言版がサイド方言版の「置き換え」である，すなわち言い換えればリュコポリス方言版よりサイド方言版のほうが成立が早い，という理解を明確に裏づける論拠は実際には発見困難であり，結局のところ，サイド方言がビザンツ期エジプトの初期にコプト語の諸方言の中で卓越した地位を占めていたという事実自体が，そのような理解（ないしは仮説）の論拠とみなされているようである（208 頁）。しかしながら，その逆（リュコポリス方言版のほうがサイド方言版よりも成立が早い）ということは実際考えにくいため，アスケランドは結局，結論部で「置き換え」という表現を用いるに至ったようである。

ただ，諸方言版の間で明確な関係が言えるのはこのケースのみのようであり，他の関係については明確な結論は提示されていない。例えば，初期ボハイル方言（Early Bohairic）版（カッセルの校訂に成る上述のヨハネ伝を指

書全体は，4 世紀半ばまでに翻訳されていたようであり，このことは，伝承がディオクレティアヌスの諸々の迫害（303～313 年）の最中ないしはそれ以前に始まったことを示唆している。サイド方言は，6 ～ 8 世紀におけるコプト語の行政文書用語（documentary language）としての台頭の期間，異論の余地ない超方言 super-dialect［地域超越的方言，の意か……戸田］だった。どうやら，サイド方言は最初期にも中心的な方言として登場していたようであり，他のコプト語諸訳（例えばリュコポリス方言訳）の翻訳のもととして機能していたようである。この現象は，エジプトの初期のキリスト教がその文化的基礎を上エジプトに有していたことを示唆する。他方，イスラムによる征服ののち，中心はデルタ地方及びワーディー・ナトルーンの修道院へと移動した」。

す）と古典ボハイル方言（Classical Bohairic）[24] 版との間には約 300 の一致，700 以上の「重要な不一致（significant disagreement）」があり，両者の関係は複雑である，ということが述べられている（235 頁）。とはいえアスケランドは，古典ボハイル方言版は「ギリシア語からの独立の翻訳だと考えられるべきである」（つまり，ギリシア語から古典ボハイル方言版への翻訳に関してコプト語の他の方言版からの影響は捨象されてよい）と述べてもおり（235 頁），この点も踏まえて結論部では，初期ボハイル方言版と古典ボハイル方言版という「二つの版は，原文たるギリシア語本文との関係という点では［互いに］独立のものだと考えられるべきである」（251 頁。［］は戸田による補足）と述べられている。

その他の方言版，すなわちアクミム方言版，中エジプトファイユーム方言版，ファイユーム方言版[25] については，「サイド方言版の手直し　redactions of the Sahidic into another dialect」である可能性があると述べられているが（251 頁），もちろんこれは可能性以上のものではない。但し，この中で中エジプトファイユーム方言版については，サイド方言版の置き換えである可能性が強いとの指摘も見られる。そして中エジプト方言版については，現存する資料自体が断片的なため，決定的なことは言えない（252 頁），とのことである。

ところで，以上新約聖書の中のヨハネによる福音書についてしか述べてこなかったが，もちろんその他の聖書文書のコプト語訳も存在する。新約聖書

[24] ここで言う「古典ボハイル方言」については，Askeland, *op. cit.*, p. xiv の説明によると「ナイル・デルタの言語であり，9 世紀以来ワーディー・ナトルーンのいくつかの修道院が卓越した存在となったことを通じて，超方言 super-dialect［地域超越的方言］となった。現代のコプト語典礼はこの方言を使い続けている」とのこと。

[25] ここで言う「中エジプトファイユーム方言版」「ファイユーム方言版」のそれぞれについては，Askeland, *op. cit.*, p. xiv の説明によると，前者は「ファイユーム方言の影響を受けた中エジプト方言の版」であり，後者は単にファイユーム方言（ファイユーム・オアシスの方言）の版だとのこと。ついでに言えば，単なる「中エジプト方言」とは，やはり同じ箇所の説明によると，中エジプトにあった都市オクシリンコスあたりの方言とのこと。

についてはHornerの校訂版が(種々問題があるとはいえ)一応新約全体に及んでいる[26]。他方，旧約聖書のコプト語訳については，ピーターズによるモーセ五書の校訂[27]を除くいずれの校訂版も，言わば校訂者が偶然手にした写本に記されていたコプト語本文を活字化した，とでも言うべき色合いが各々強く[28]，つまり，系統的な研究は長らく行なわれてこなかったと言ってよい。

---

[26] 書誌情報は次のとおり。まずボハイル方言版（Oxford: Clarendon Press, 1898–1905 刊行）は，vol. 1: *The Gospels of S. Matthew and S. Mark Edited from Ms. Huntington 17 in the Bodleian Library*, vol. 2: *The Gospels of S. Luke and S. John Edited from Ms. Huntington 17 in the Bodleian Library*, vol. 3: *The Epistles of S. Paul Edited from Ms. Oriental 424 in the British Museum*, vol. 4: *The Catholic Epistles and the Acts of the Apostles Edited from Ms. Oriental 424. The Apocalypse Edited from Ms. Curzon 128 in the Care of the British Museum*. 次にサイド方言版（Oxford: Clarendon Press, 1911–1924 刊行）は，vol. 1: *The Gospels of S. Matthew and S. Mark*, vol. 2: *The Gospel of S. Luke*, vol. 3: *The Gospel of S. John; Register of Fragments, etc.; Facsimiles*, vol. 4: *The Epistles of S. Paul*, vol. 5: *The Epistles of S. Paul (continued), Register of Fragments, etc.*, vol. 6: *The Acts of the Apostles*, vol. 7: *The Catholic Epistles and the Apocalypse*. これら諸書を筆者は復刻版（Osnabrück: Otto Zeller, 1969）によって参照した。Hornerの校訂版は，様々な断片を継ぎ合わせて作られており，しかもその際明確な校訂方針が必ずしもあるわけでない，という点におもな問題を抱えていると言ってよい。

[27] M.K.H. Peters (ed.), *Genesis* (Septuagint and cognate studies series / Society of Biblical Literature, 19: A critical edition of the Coptic (Bohairic) Pentateuch, 1), Atlanta, GA: Scholars Press, 1985; id. (ed.), *Exodus* (Septuagint and cognate studies series / Society of Biblical Literature, 22: A critical edition of the Coptic (Bohairic) Pentateuch, 2), Atlanta, GA: Scholars Press, 1986; id. (ed.), *Deuteronomy* (Septuagint and cognate studies series / Society of Biblical Literature, 15: A critical edition of the Coptic (Bohairic) Pentateuch, 5), Chico, CA: Scholars Press, 1985. いずれもボハイル方言版。

[28] 以下の列挙は網羅的でないことをお断わりしておかねばならない。なお，W. Kammerer, *A Coptic Bibliography*, Ann Arbor: University of Michigan Press, 1950 所収の情報を参考にした。モーセ五書：P.A. de Lagarde (ed.), *Der Pentateuch koptisch*, Leipzig: Teubner, 1857（ボハイル方言版）。ヨシュア記，士師記，ルツ記，ユディト書，エステル記：H. Thompson (ed.), *A Coptic Palimpsest containing Joshua, Judges, Ruth, Judith and Esther in the Sahidic Dialect*, London: Frowde, 1911（サイド方言版）。イ

この欠けを補うべく始められたのが，長年ザルツブルク大学で教えたドイツ人学者K・シュスラーによる「Biblia Coptica　Die koptische Bibeltexte」という叢書である。シュスラーによって出された計13巻[29]を見る限りでは対象がサイド方言訳に限られているようだが，ともあれコプト語版旧新約聖書の一部を載せた写本をどんなものでもカタログ化しようというのが同叢書の眼目である。その際，悪名高いことにコプト語写本は，エジプトで発見されてヨーロッパの図書館によって購入されるに至るまでに，高値での売却が企図された結果，写本がバラバラにされ複数の図書館が断片を購入する羽目になるという経過をたどったことが稀でなく，そのため写本の元来の構成を復元するのは決して容易な作業でない。この復元作業（復元自体を行なったのは必ずしもシュスラーでなく，往々，当のコプト語本文を校訂した校訂者自身である）の結果までをもこの叢書 Biblia Coptica はカタログ化しており，作業に要した苦労のほどは驚嘆に値する。そしてついに2013年には，Biblia

ザヤ書，エレミヤ書，エゼキエル書，ダニエル書：H. Tattam (ed.), *Prophetae Majores, in dialecto linguae aegyptiacae memphitica seu coptica*, 2 vols., Oxonii: E typographeo academico, 1852.（ボハイル方言版）。ヨブ記，箴言，伝道の書，ソロモンの知恵，集会の書：H. Thompson (ed.), *The Coptic (Sahidic) Version of Certain Books of the Old Testament from a Papyrus in the British Museum*, London: Froude, 1908（サイド方言版）。

[29] 書誌情報は次のとおり。出版社は Harrassowitz Verlag（Wiesbaden）で，vol. 1: *Das sahidische Alte und Neue Testament*, Lieferung 1: sa 1–20 (1995); Lieferung 2: sa 21–48 (1996); Lieferung 3: sa 49–92 (1998); Lieferung 4: sa 93–120 (2000). vol. 2: *Das sahidische Alte und Neue Testament. Vollständiges Verzeichnis mit Standorten*, Lieferung 1: sa 121–184 (2012). vol. 3: *Das sahidische Alte und Neue Testament. Vollständiges Verzeichnis mit Standorten*, Lieferung 1: sa 500–520 (2001); Lieferung 2: sa 521–540 (2003); Lieferung 3: sa 541–560 (2004); Lieferung 4: sa 561–585 (2006). vol. 4: *Das sahidische Alte und Neue Testament. Vollständiges Verzeichnis mit Standorten*, Lieferung 1: sa 586–620 (2007); Lieferung 2: sa 621–672 (2009); Lieferung 3: sa 673–720 (2010); Lieferung 4: sa 721–780 (2011).　以上については著者は K. Schüssler。また，シュスラーの死後に次の巻が刊行されている。vol. 2: *Das sahidische Alte und Neue Testament. Vollständiges Verzeichnis mit Standorten*, hrsg. von K. Schüssler, bearbeitet von F. Feder & H. Förster, Lieferung 2: sa 185–260 (2015).

Coptica でのこのような準備作業を踏まえて，ヨハネによる福音書の校訂版が Arbeiten zur Biblia Coptica という新たな叢書の第一巻として刊行された[30]。しかし同年 10 月にシュスラーが自動車事故で亡くなってしまい[31]，今後これら叢書の刊行が継続されるかどうかは現在不透明な状況である。いずれにせよ，コプト語訳聖書の成立年代（の分布）等々といった問題は研究上なお未開拓の領域だと言ってよい。

最後に，コプト語聖書における正典の問題について一言しておきたい。『使徒たちのカノン』と称される文書があり，そのコプト語訳も存在するが，同文書の末尾に正典とされるべき文書の一覧があり，19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてイタリアの東方キリスト教研究の大家だったＩ・グイーディがこれを論文でとりあげている[32]。同論文によれば，この『カノン』にはアラビア語訳さらにエチオピア語訳もあり，それらの関係はかなり込み入っているが，ここではグイーディが結論的に記している箇所のみ引用しておく。それによると[33]，

> コプト教会の『使徒たちのカノン』のこれら様々な形から帰結する聖なる書物の数は以下のとおりである。[各文書の呼称は日本語訳で使われているものを準用することとする。以下でも同様。]
>
> モーセ五書，ヨシュア，士師記，ルツ記，列王記 4 巻，歴代誌 2 巻，エズラ記及びネヘミヤ記，ヨブ記，詩篇（151 または 150 篇），箴言，伝道の書［或いはコヘレトの書］，雅歌，十二小預言者，４大預言者［イザヤ書，エレミヤ書，エゼキエル書，ダニエル書］，ソロモンの知恵，ユディ

[30] K. Schüssler (ed.), *Das koptisch-sahidische Johannesevangelium sa 506 aus dem Jeremias-Kloster von Sakkara* (Arbeiten zur Biblia Coptica, 1), Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2013.

[31] シュスラーの死についてはオーストリアのコプト学者Ｈ・フェルスターによる追悼記事がある。H. Förster, “Karlheinz Schüssler (6.9.1940–7.10.2013)”, *Journal of Coptic Studies* 15 (2013), pp. IX–X.

[32] I. Guidi, “Il canone biblico della chiesa copta”, *Revue biblique* 10 (1901), pp. 161–174.

[33] Ibid., pp. 172–173.

ト書，トビト書，エステル記，マカベア書 3 巻，集会の書。

4 福音書，使徒行伝[使徒言行録]，7 つの公同書簡，14 のパウロ書簡[ヘブル書を含む]，黙示録，さらにクレメンスの 2 つの書簡。

但し，グイーディの論文ではこれに続いて「この数はエジプトとエチオピアで古い時代に聖なる書物とみなされた書物を含んでいない」とあり（例えばエチオピアで尊重されたエノク書やヨベル書などを指すと思われる……エチオピア語聖書の正典については後述「エチオピア語訳」の項を参照)，『使徒たちのカノン』の伝承経路にもかかわる説明が提示されているが，ここでは省略する。ともあれ，少なくとも上で列挙された書物がコプト教会における聖書正典に含まれていたと理解することは可能だろうと思われる。

3．アルメニア語訳

アルメニアにおける聖書翻訳はアルメニア文字の発明と不可分なものとして通常語られている。以下，フランス語圏における聖書学関係の代表的な事典として知られる *Dictionnaire de la Bible* の補遺（*Supplément*）に収録されたアルメニア学者ルイ・ルロワールによる説明[34] に拠りつつ述べると，当時のアルメニア教会の指導者だったサハクから 393 年ごろに司祭職に叙階されたメスロプ・マシュトツはアルメニアの辺境地方に宣教の旅に赴き，その中で，アルメニア人たちに自国語で書かれた聖書を与えることの必要性に気づいた。そしてそのためにはアルメニア文字を発明することが必要であり，この発明はルロワールによれば 407～408 年ごろエデッサで行なわれた(もちろんこれと異なる年代を主張する議論もある由)。36 文字から成るアルメニア文字のうち 20 字はギリシア文字に由来し，12 字はギリシア文字をモデルに形づくられ，そして 4 字はシリア語の文字からの借用だとのことである。最

[34] Louis Leloir, Art. “Orientales de la Bible (versions). 2. Versions arméniennes”, in: *Supplément au Dictionnaire de la Bible*, vol. 6, Paris: Letouzey & Ané, 1960, coll. 810–818. アルメニア文字の発明をめぐる以下の記述の主たる典拠を成しているのは，アルメニア語文学の最古のオリジナル作品の一つであるコリウン著『マシュトツ伝』だろう。

初にアルメニア語に翻訳された聖書の文書は箴言であり，そのあとほどなく新約聖書の翻訳も行なわれ，続いて旧約聖書の他の文書も翻訳され，ルロワールによれば「414 年には聖書はほぼ完全にアルメニア語に翻訳された。この事業においてマシュトツとサハクは確かに非常に大きな役割を果たしただろう」（col. 811）。

新約聖書のアルメニア語版に関する最新の概説と言えるカウの論文によると，アルメニア語聖書は全体として，最初の翻訳のあと一世代経つか経たないうちに一度だけ大規模な修正（major revision）を経たとのことであり，そして福音書や新約聖書の他の諸文書の最初の翻訳が，部分的或いは全面的にシリア語版をもとにしていたとして，これに対して大規模な修正の際に範型（モデル）となったのはギリシア語版だった[35]。福音書本文の型についてはカイサリア型であるとかそれに対する異論だとか様々な議論があるようであり，これに対して使徒言行録はアレクサンドリア型に近いという（268 頁）。ヨハネの黙示録については，往年の偉大なアルメニア学者 F・コニーベアによれば，最初の翻訳のあと 5 世紀のうちに新約聖書の他の文書と同様に修正を経て，のち 8 世紀の交にさらに徹底的な修正・編集が行なわれ，そして最後に 12 世紀にランブロンのネルセスによる修正・編集を受けた（269 頁）。

但し，この種の議論が進展するためには，そもそも聖書自体の批判校訂版が整備されることがその必要条件を成すが，この点ではアルメニア語聖書の研究はなお立ち遅れているようである。すなわち，旧新約聖書全体の校訂版として今日に至るまで使われているのは 1805 年刊のゾフラピアン校訂の聖書（言うまでもなく今日的水準の批判校訂版とは到底称しえない）であり[36]，

---

[35] S. Peter Cowe, “The Armenian Version of the New Testament”, in: Ehrman & Holmes, pp. 253–292, at p. 268.

[36] Hovhann Zohrapian (ed.), *Astuatsashunch‘ matean hin ew nor ktakarants‘ (Scriptures of the Old and New Testaments). A Facsimile Reproduction of the 1805 Venetian Edition with an Introduction by Claude Cox*, Delmar, NY: Caravan Books, 1984. このように本書が 1984 年に再刊されたこと自体が，アルメニア語聖書の研究状況（のそれまでの停滞ぶり）の反映だと言えよう。

これを超克するべくアルメニア本国で旧約聖書の校訂版がシリーズで出されたこともあるが，これは校訂の方針が極めて不充分で，素材の提示をほとんど超えていない産物だったとのことであり（264 頁；同頁註 51 によれば，このシリーズを主導した学者 2 人の死去によってシリーズの刊行は頓挫した由），これまでのところでは旧新約聖書（及びいわゆる偽典）の各文書について校訂版が散発的に刊行されるにとどまっているようである[37]。但し，聖書本文の研究の前提となる写本研究にとって欠かせないアルメニア語古書体学に関する著作が今世紀初頭に刊行され[38]，また諸種の文献目録が 1990 年代以降に整備されるなど[39]，聖書本文の本格的研究のための条件は整いつつあるようである。

最後にアルメニア語聖書における正典の問題について。上述のカウの論文によると，正典文書を列挙した，古代から中世にかけてのアルメニア語版リ

---

[37] 全くこの分野の門外漢である筆者としては，もとより網羅的なリストの作成を期するべくもないので，これまでに入手しえた限りの校訂版の列挙に以下とどめると，S. Peter Cowe (ed.), *The Armenian Version of Daniel* (University of Pennsylvania Armenian Texts and Studies, 9), Atlanta, GA: Scholars Press, 1992; Claude E. Cox (ed.), *Armenian Job. Reconstructed Greek Text, Critical Edition of the Armenian with English Translation* (Hebrew University Armenian Studies, 8), Leuven: Peeters, 2006; Michael E. Stone (ed.), *An Editio Minor of the Armenian Version of the Testaments of the Twelve Patriarchs* (Hebrew University Armenian Studies, 11), Leuven: Peeters, 2012.

[38] M.E. Stone, D. Kouymjian & H. Lehmann, *Album of Armenian Paleography*, Aarhus: Aarhus University Press, 2002.

[39] 写本カタログのカタログとして B. Coulie, *Répertoire des bibliothèques et des catalogues de manuscrits arméniens* (CChr. Series Graeca), Turnhout: Brepols, 1992; Id., “Répertoire des bibliothèques et des catalogues de manuscrits arméniens. Supplément I”, *Muséon* 108 (1995), pp. 115-130; Id., “—. Supplément II”, *Muséon* 113 (2000), pp. 149-176; Id., “—. Supplément III”, *Muséon* 117 (2004), pp. 473-496。アルメニア語著作家及びアルメニア語著作に関する文献目録として Robert W. Thomson, *A Bibliography of Classical Armenian Literature to 1500 AD* (CChr), Turnhout: Brepols, 1995; Id., “Supplement to *A Bibliography of Classical Armenian Literature to 1500 AD*: Publications 1993-2005”, *Muséon* 120 (2007), pp. 163-223。

ストは種々存在するが，それらが実際の取り扱い（例えば写本書写の際に当該文書を含めるか否か，といったこと）とどれほど関係しているかはよくわからないというのが実情のようである(272 頁)。それゆえ，(カウはそれらのうちのいくつかを実際にとりあげて論じているが）ここではそれら古い正典リストをめぐる問題にはこれ以上立ち入らないことにする。因みに，今日の(現代)アルメニア語聖書(東方言版)[40] に含まれる文書を列挙すると以下のとおりである。まず旧約聖書は創世記，出エジプト記，レビ記，民数記，申命記，ヨシュア記，士師記，ルツ記，王国の書Ⅰ～Ⅳ［＝サムエル記上下，列王記上下］，歴代誌上下，エズラ記Ⅰ～Ⅱ，ネヘミヤ記，エステル記，ユディト記，トビト記，マカバイ記Ⅰ～Ⅲ，詩編，箴言，伝道の書，雅歌，知恵の書，シラ書，ヨブ記，イザヤ書，ホセア書，アモス書，ミカ書，ヨエル書，オバデヤ書，ヨナ書，ナホム書，ハバクク書，ゼファニヤ書，ハガイ書，ゼカリヤ書，マラキ書，エレミヤ書，バルク書，哀歌，ダニエル書，エゼキエル書で計 48 の文書から成っている。次いで新約聖書は，含まれる文書も順番も通常の聖書と全く同じで，計 27 の文書から成っている。

4．グルジア語訳

冒頭で記したように，聖書のグルジア語訳についての筆者の知識はほとんど皆無と言ってよいため，ここでは諸々の概説，特に，新約聖書の本文批判との関連でグルジア語版聖書(より正確には，グルジア語版新約聖書)を扱っているチルダーズの概説[41] を参照しつつ記すことにする。

---

[40] ここでは *Astuatsashunch‘ matean hin ew nor ktakaranneri. Arevelhajeren nor t‘argmanut‘iun (Scriptures of the Old and New Testaments. Eastern Armenian New Translation)*, Yerevan: The Bible Society of Armenia, 1994 に拠った。なお，ここで言う「東方言」とは今日のアルメニア本国で使われているアルメニア語のことである。これに対して「西方言」は，ヴェネツィアなどで出版されるアルメニア語刊行物に用いられている。

[41] J.W. Childers, “The Georgian Version of the New Testament”, in: Ehrman & Holmes, pp. 293-327.

キリスト教が相当早くに（早いところでは紀元後3世紀に）グルジアに浸透していたと論じるチルダーズの議論にはここでは立ち入らないが[42]，そのように考えるチルダーズでも，グルジアに文字ができたのはキリスト教の浸透以前ではないと考えているようである。アルメニア文字を発明したメスロプ・マシュトツがグルジア語の文字をも発明したという伝説もあるが，その当否はともかく，4世紀末から5世紀初頭ごろにキリスト教の宣教との関連の中でグルジア語の文字が発明され，グルジア語が文学語として使用されるようになった，というのがチルダーズの見方であり（294頁），これ以後8世紀に至るまでの言語段階が初期古グルジア語（Early Old Georgian），9～11世紀の言語段階が古典古グルジア語（Classical Old Georgian）とされ，そしてこれらいずれの言語段階についても，それを伝える最も重要な文学作品は聖書それ自体だった，と（295頁）。そして物としての写本（より正確には冊子本）に即して言うと，新約聖書は典型的にはオトゥフタヴィ（「4福音書」の意）とサモツィクロ（「使徒書」の意，すなわち使徒言行録，パウロ書簡，そしてふつう公同書簡を含む）の2巻から成っており，ヨハネの黙示録はようやく10世紀に翻訳され，以上の新約文書諸書とは別な形で流布した（297頁）。

福音書のグルジア語訳は5世紀までには行なわれており，そのことは，グルジア語文学の最古のオリジナル作品の一つである『シュシャニクの殉教』（この著作は5世紀末に著作されたとの説がある ── 但し，6世紀末～7世紀

[42] チルダーズがこの点に関して論考の註の中で挙げている参考文献のうち，筆者が参照しえたのはS.H. Rapp, “Georgian Christianity”, in: K. Parry (ed.), *The Blackwell Companion to Eastern Christianity*, Oxford: Blackwell, 2007, pp. 137–155のみだが，Rappのこの論考は註が付されていないごく概説的な論述であり，グルジアへのキリスト教の宣教に関する専門研究とは言いがたい。ルフィヌス『教会史』が伝えるイベリア（今日のグルジアの一部の地域の古代名）へのキリスト教の宣教（通常この事例が，グルジアへのキリスト教宣教の最古の段階との関連で引き合いに出されることが多い）は4世紀の話であり，この話自体が信憑性等々をめぐって論じられている状況にあって，それよりさらに早い3世紀に既に，今日のグルジアを構成する地域のいずれかにキリスト教が浸透していたとするチルダーズの議論は，にわかには信じがたい。

初頭に著作されたとの説もある）の中に引用が多く見られることからも窺われるという。但し，「福音書については批判校訂版［ギリシア語版福音書における批判校訂版であるいわゆる Nestle-Aland に相当するような，グルジア語版福音書に関する批判校訂版，との意味だろう……戸田］は１つも存在しない」(298 頁)。これまでに刊行されてきたのは，福音書に関する早い時期の証拠を印刷に付したものであり，例えば，アディシュ写本 (897 年) などに見られる福音書本文がブレイクやブリエールによって公刊されている[43]（299 頁)。また，ギッパートらによって，ウィーン所在の写本のパリンプセストの本文が比較的最近公刊されている[44]。

チルダーズはここで，トビリシ国立大学によるグルジア語の文章のオンライン公表プロジェクトである Armazi プロジェクト ── ドイツのフランクフルト大学の TITUS（Thesaurus Indogermanischer Text- und Sprachmaterialien）の協力を得て，グルジア語版聖書を始めとする様々なグルジア語著作の本文が公表されている ── の意義を強調している（299–301 頁)。但し，その中で述べられているように，そのようにして公表された本文には誤りも散見され，また校訂序論などが付されておらず校訂方針が不明であるなど，このプロジェクトの公表物は様々な問題を蔵しているようであり，(例えば旧約

---

[43] Robert P. Blake (ed.), *The Old Georgian Version of the Gospel of Mark from the Adysh Gospels with the Variants of the Opiza and Tbet' Gospels* (PO, 20.3), Turnhout: Brepols, 1974 (repr.); Id. (ed.), *The Old Georgian Version of the Gospel of Matthew from the Adysh Gospels with the Variants of the Opiza and Tbet' Gospels* (PO, 24.1), Turnhout: Brepols, 1983 (repr.); Robert P. Blake & Maurice Brière (eds.), *The Old Georgian Version of the Gospel of John from the Adysh Gospels with the Variants of the Opiza and Tbet' Gospels* (PO, 26.4), Paris: Firmin-Didot et Cie, 1950; Maurice Brière (ed.), *La version géorgienne ancienne de l'Evangile de Luc d'après les Evangiles d'Adich avec les variantes des Evangiles d'Opiza et de Tbet'* (PO, 27.3), Paris: Firmin-Didot et Cie, 1955.

[44] Jost Gippert, Zurab Sarjveladze, & Lamara Kajaia, *The Old Georgian Palimpsest: Codex Vindobonensis georgicus 2* (Monumenta palaeographica Medii Aevi: Series Ibero-Caucasica, 1), Turnhout: Brepols, 2008（筆者未見）。

聖書のシリア語訳であるペシッタに関して上述したように）これら校訂を基にしてさらなる議論が可能となっているという状況だなどとは到底言えないようである。

そのような状況に照応して，福音書本文の系統の研究もなお発展途上にあるらしい。より具体的に記すと，福音書本文の系統として従来 Gg_1 と Gg_2 という区別が行なわれてきており，Armazi プロジェクトでもこの考え方が踏襲されている。Gg_1 は基本的にアディシュ写本の本文と同じであり，これに対して Gg_2 のほうは別のいくつかの写本によって伝えられている本文のようであり，そして両者の関係については「Gg_2 は Gg_1 を修正したものだ」という理解が従来存在した（303 頁）。しかしチルダーズによると両者の関係はもっと複雑で，むしろ「Gg_1 と Gg_2 は並行的に発展した」（304 頁）と言うほうが妥当なようであり，しかもさらにチルダーズは「要するに Gg_1 と Gg_2 の正確な相互関係や派生関係は依然謎のままである」（同）とも記しており，結局良くわからないというのが現状のようである。福音書以外についても，あとは推して知るべしといったところではなかろうか。かくてグルジア語版新約聖書については，チルダーズ自身の論文，及びチルダーズが頻繁に参照している，長らくバーミンガム大学で新約聖書本文研究を行なった J・N・バーヅォール（J. Neville Birdsall，1928-2005）の論文[45] を手がかりに，自ら勉強して理解を深めていくほかに道はなさそうである。

なお，チルダーズの論文は，アトス山のイヴィロン修道院などを拠点として行なわれた聖書のグルジア語訳にも触れている（314-320 頁）が，ここではこれ以上立ち入らないことにする。

最後に，グルジア語聖書における正典の問題については，諸般の事情に鑑み，ここではアルメニア語聖書の場合に見たのと同様，今日の（現代）グルジア語聖書[46] に含まれる文書の列挙を以て事足れりとするほかない。まず旧

---

[45] チルダーズやバーヅォールの諸論文は CHILDERS, in: EHRMAN & HOLMES, pp. 320-327 の参考文献一覧において列挙されている。

[46] ここでは *Biblia*, Tbilisi: Sak‘art‘velos Sapatriark‘os gamoc‘ema（グルジア総主教座版），1989に拠った。なお，筆者はこの他に *Biblia. żveli da axali aġvt‘k‘mis cignebi*,

約聖書は創世記，出エジプト記，レビ記，民数記，申命記，ヨシュア記，士師記，ルツ記，王たちの書Ⅰ～Ⅳ［＝サムエル記上下，列王記上下］，歴代誌上下，エズラ記Ⅰ，ネヘミヤ記，エズラ記Ⅱ，トビト記，ユディト記，エステル記，ヨブ記，詩編，箴言，伝道の書，雅歌，知恵の書，シラ書，イザヤ書，エレミヤ書，哀歌，エレミヤの手紙，バルク書，エゼキエル書，ダニエル書，ホセア書，ヨエル書，アモス書，オバデヤ書，ヨナ書，ミカ書，ナホム書，ハバクク書，ゼファニヤ書，ハガイ書，ゼカリヤ書，マラキ書，マカバイ記Ⅰ～Ⅳ，エズラ記Ⅲで計 51 の文書から成っており，次いで新約聖書はマタイ伝，マルコ伝，ルカ伝，ヨハネ伝，使徒言行録，ヤコブの手紙，ペトロの手紙Ⅰ～Ⅱ，ヨハネの手紙Ⅰ～Ⅲ，ユダの手紙，ローマの信徒への手紙，コリントの信徒への手紙Ⅰ～Ⅱ，ガラテヤの信徒への手紙，エフェソの信徒への手紙，フィリピの信徒への手紙，コロサイの信徒への手紙，テサロニケの信徒への手紙Ⅰ～Ⅱ，テモテへの手紙Ⅰ～Ⅱ，テトスへの手紙，フィレモンへの手紙，ヘブル人への手紙，ヨハネの黙示録で計 27 の文書から成っている。

5．エチオピア語訳

まず，以下この項で言う「エチオピア語」とはいわゆるゲエズ，すなわち古典エチオピア語を指すことをお断わりしておく。

4 世紀にキリスト教がエチオピアに伝播し，しかもそのエチオピア（正確にはアクスム王国）がキリスト教に改宗したということは，キリスト教的著作以外の史料からも確認でき，改宗の事実自体は疑いを容れない[47]。そして，

Tbilisi: Sak‘art‘velos bibliuri sazogadoeba（グルジア聖書協会），2001 というグルジア語聖書をも所蔵しているが，こちらはプロテスタントの聖書と同じ文書のみを含んでいる（但し総主教座版と同様，新約聖書の順番が福音書―使徒言行録―公同書簡―パウロ書簡―黙示録となっている）。

[47] この点に関する日本語の概説としては，蔀勇造「幸福なアラビア（イスラム以前）」，前嶋信次・杉勇・護雅夫編『オリエント史講座 3　渦巻く諸宗教』，学生社，1982 年，237-262 頁（特に 252-256 頁）を参照。

ドイツのハンブルク大学の研究者が中心となって比較的最近刊行された『エチオピア百科事典』の「聖書」(Bible)の項を見ると，冒頭に次のようにある[48]。

「紀元後 4 世紀前半におけるアクスムのキリスト教化は，エチオピア語聖書の速やかな創造へと帰着した（聖書なしには礼拝，宣教，宗教生活は考えられなかっただろう）。翻訳の時期の最初についてはいかなる情報もない。とはいえ，聖書に関する作業は 4 世紀末或いは 5 世紀初頭に福音書の翻訳を以て始まったと想定されてよい。6 世紀末までには聖書の最も重要な部分の翻訳は完了していた。」

この記述のうち「聖書なしには礼拝，宣教，宗教生活は考えられなかっただろう」という箇所は疑問の余地なしとしない。聖書そのものがなくとも典礼書があれば礼拝・宣教・宗教生活は実践可能だからである。とはいえ，6 世紀前半にまで遡るアクスムの碑文中に聖書（詩編，ヨブ記，イザヤ書，マタイ伝，ヨハネ伝）からの引用が見られることなどを根拠にハンブルクのウーリヒ教授が「7 世紀におけるアクスムの衰退より以前にエチオピア語訳聖書が完成していたことを疑う理由はない」と言うのに対して[49]，疑念を差し挟む根拠はもとより筆者にはない。但し，今日知られる古典エチオピア語（ゲエズ）の写本の年代は通常古くても 13-14 世紀であり[50]，仮にウーリヒ教授の上記発言を受け入れても，7 世紀に存在したであろうエチオピア語訳聖書の本文が，13・14 世紀或いはそれ以降の写本が伝える本文の中でどれほど正確に保存されているかはなお問われてよい。実際，この時期のエチオピア語文学一般で見た場合，翻訳の多くはアラビア語からの翻訳であり[51]，エチオピア語

---

[48] S. Uhlig, art. “Bible. Time and context”, in: Id. (ed.), *Encyclopaedia Aethiopica*, vol. 1, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2003, p. 563.

[49] Ibid.

[50] Art. “Manuscripts”, in: S. Uhlig (ed.), *Encyclopaedia Aethiopica*, vol. 3, p. 740. この点については後述をも参照。なお，エチオピア語写本の研究（より正確に言えば，書体学的研究）の画期を成す著作と言える S. Uhlig, *Äthiopische Paläographie* (ÄthF, 22), Stuttgart: Franz Steiner, 1988 を著したのも，他でもないウーリヒ教授である。

[51] この時期のアラビア語からエチオピア語への翻訳については Enrico Cerulli, *La letteratura etiopica*, 3. ed., Firenze: Sansoni, 1968, pp. 54-56 を参照。

訳聖書についてもアラビア語訳聖書からの影響はありうるからである。

より具体的にエチオピア語訳新約聖書について最近の概説[52]を見ると，まず，エチオピア語訳新約聖書について研究の名に値するものが産出されるようになったのはここ半世紀ほどのことらしい。同概説の文献目録などに拠りつつ，エチオピア語訳新約聖書の批判校訂版を年代順に列挙すると，ヨハネの黙示録[53]，マルコによる福音書[54]，公同書簡[55]，エフェソの信徒への手紙・フィリピの信徒への手紙・コロサイの信徒への手紙・フィレモンへの手紙[56]，マタイによる福音書[57]，ローマの信徒への手紙[58]，ヘブル人への手紙[59]，ヨハネによる福音書[60]が校訂されてきた。

エチオピア語新約聖書の成立について，シリアの修道士が故郷での迫害を理由として6世紀初頭にエチオピアにやって来たという「9人の聖人の伝説」と結びつける形でこれを説明しようとする試みが例えばA・ヴェエブスに

---

[52] Zuurmond & Niccum. 元々ズールモントが書いた原稿にニッカムによる修訂が加わったものが収録されたらしく，この論考自体の最終的な著者はニッカムのようである。

[53] J. Hofmann, *Die äthiopische Übersetzung des Johannes-Apokalypse*, 2 vols. (CSCO, 281–282), Louvain: Secrétariat du CSCO, 1967.

[54] R. Zuurmond, *Novum Testamentum Aethiopice: The Synoptic Gospels*, Part 1: *General Introduction*, Part 2: *Edition of the Gospel of Mark* (ÄthF, 27), Stuttgart: Steiner, 1989.

[55] J. Hofmann & S. Uhlig, *Novum Testamentum Aethiopice: Die katholischen Briefe* (ÄthF, 29), Stuttgart: Steiner, 1993.

[56] H. Maehlum & S. Uhlig, *Novum Testamentum Aethiopice: Die äthiopischen Version der Gefangenschaftsbriefe des Paulus* (ÄthF, 33), Stuttgart: Steiner, 1993.

[57] R. Zuurmond, *Novum Testamentum Aethiopice: The Synoptic Gospels*, Part 3: *The Gospel of Matthew* (ÄthF, 55), Wiesbaden: Harrassowitz, 2001.

[58] Abraha Tedros, *La Lettera ai Romani: Testo e commentari della versione etiopica* (ÄthF, 57), Wiesbaden: Harrassowitz, 2001.

[59] Abraha Tedros, *The Ethiopic Version of the Letter to the Hebrews* (StT, 419), Vatican City: Biblioteca Vaticana, 2004.

[60] M. Wechsler, *Evangelium Iohannis Aethiopicum* (CSCO, 617), Lovanii: Peeters, 2005.

よって行なわれたことがあるが[61]，最近の研究ではシリア（或いはシリア語）とのこのような関連づけは否定されつつあるようである。すなわち，多くのいわゆる「シリア語法 Syriacisms」はアラビア語の影響を呈している写本にのみ見られるとのことで[62]，むしろアラビア語の影響が考慮されるべきだということなのだろう。そしていずれにせよ，翻訳者たちのギリシア語力は貧弱だったと考えるのが妥当なようである。

より具体的にマタイ伝の場合で言えば，最初期の本文型Ａは 6 世紀に存在したことが， 6 世紀に成立したとされる碑文に当該福音書の章句が含まれていたこと，及び，炭素 14 による年代測定の結果 6 世紀のものとされる写本（Abbâ Garimâ Gospels）の中にこの本文型が見られることから，今日明白である。そして当然，このＡ本文についてはアラビア語の影響は存在しないことになる。

しかしＢ本文と称される本文型も存在し，中世後期の写本に見られる。このＢ本文の特徴は写本間の相違が少ないことで，このことはこのＢ本文が何らか権威的な伝承のもとにあったことを示唆しているという。最近の概説によれば，Ｂ本文は，エチオピアに所在しシリア的背景を有したアラビア語話者たる聖職者が 12〜13 世紀に古い本文型（＝Ａ本文，と理解するほかないだろう）を改訂した結果だろう，とのことである[63]。そしてこれ以降 3 世紀間に，本文への追加や説明的補足や拡張が行なわれ，Ｃ本文ができ，さらに同様な経過を経てＤ本文，Ｅ本文が成立した由（詳細はここでは略）。

以上，もっぱら新約聖書のエチオピア語訳について見てきたが，もちろん旧約聖書のエチオピア語訳も存在する。これについては 19 世紀後半に旧約聖書学・セム語学の分野で活躍したＡ・ディルマン（1823-1894）の一連の校訂

[61] Zuurmond & Niccum, p. 236. ここで言及されている Vööbus の議論は例えば A. Vööbus, *Early Versions of the New Testament. Manuscript Studies*, Stockholm, 1954, pp. 246-247 あたりに見られる。

[62] Zuurmond & Niccum, p. 237.

[63] Ibid., p. 241.

作業がまず挙げられねばならない[64]。旧約聖書（もちろんヘブル語版）の註解書を書いてもいるこの学者にとってエチオピア語文献研究がどれほどの比重を有したのか，筆者には見当がつかないが，少なくともエチオピア語文献研究の側からすれば，ディルマンの遺した業績は今なお圧倒的なものと言ってよい。というのも，ディルマンの著したエチオピア語の文法書[65]は系統的な文法書として今日まで参照され続け，彼がラテン語を記述言語として編纂したエチオピア語の辞典[66]は，エチオピア語文献の読解のための不可欠な道具であり続けているからである[67]。さらにディルマンは，いくつかの重要なエチオ

---

[64] 筆者の知りえた限りでは次のようなものがある。

- A. Dillmann (ed.), *Veteris Testamenti Aethiopici Tomus primus sive Octateuchus Aethiopicus*, Lipsiae, 1853（創世記〜ルツ記までの 8 書が収められている）
- Id. (ed.), *Veteris Testamenti Aethiopici Tomus secundus sive Libri regum, Paralipomenon, Esdrae, Esther*, Lipsiae, 1861（実際には Libri regum の最初の 2 巻が収められている）
- Id. (ed.), *Veteris Testamenti Aethiopici Tomus secundus sive Libri regum, Paralipomenon, Esdrae, Esther. Fasciculus secundus, quo continentur libri regum III et IV*, Lipsiae, 1871(Libri regum の第 3 ・ 4 巻が収められている）
- Id. (ed.), *Veteris Testamenti Aethiopici Tomus quintus, quo continentur Libri Apocryphi, Baruch, Epistola Jeremiae, Tobith, Judith, Ecclesiasticus, Sapientia, Esdrae Apocalypsis, Esdrae Graecus*, Berolini, 1894（表題にあるようにバルク書，エレミヤの手紙，トビト記，ユディト記，シラ書，知恵の書，エズラの黙示録［エズラ記（ラテン語）と大幅に重なる］，エズラ記II［エズラ記（ギリシア語）］が収められている）

[65] A. Dillmann, *Grammatik der äthiopischen Sprache*, Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, 1959 (repr. of Leipzig, 1899). 本書には英訳もある。

[66] Chr. Fr. A. Dillmann, *Lexicon Linguae Aethiopicae cum indice Latino*, Osnabrück: Biblio Verlag, 1970 (repr. of 1865).

[67] ディルマン以後ではセム語学者ウォルフ・レスラウがエチオピア語辞典を刊行している。W. Leslau, *Comparative Dictionary of Ge'ez (Classical Ethiopic)*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1991. 語源に関する説明については今やレスラウのこの辞典が参照されるべきだが，同辞典には，ディルマンの辞典に見られるような各単語の用法（或る動詞がどういう前置詞と共に用いられるかといった，いわゆる語用 collocation）の説明が全くない。したがって，エチオピア語の文章を読解するためにはディルマンの辞典は依然不可欠である。

ピア語写本コレクション（聖書写本に限られない）について写本カタログを著してもいる。

ディルマン以降にもいろいろな旧約文書の校訂版は刊行されてきている[68]。但し，コプト語版旧約聖書について上述したのと同様，それら校訂版は往々にして，校訂者が偶然手にした写本に記されていたエチオピア語聖書本文を活字化した，とでも言うべき色彩が強いように思われる。

---

[68] 以下の列挙に際してはE. Ullendorff, *Ethiopia and the Bible*, London: Oxford University Press (published for the British Academy), 1968, p. 34 の記述を参照した。

- Johannes Bachmann, *Der Prophet Jesaia nach der aethiopischen Bibeluebersetzung*, Berlin: Emil Felber, 1893（イザヤ書）
- J. Oscar Boyd, *The Octateuch in Ethiopic according to the Text of the Paris Codex, with the Variants of Five Other Manuscripts*, Part 1: *Genesis*, Leyden: E.J. Brill, 1909; Part 2: Exodus and Leviticus, 1911（創世記，出エジプト記，レビ記）
- Francisco Maria Esteves Pereira (ed.), *Le livre de Job. Version éthiopienne* (PO, 2. 5), Turnhout: Brepols, 1982 (repr.)（ヨブ記）
- Id. (ed.), *Le livre d'Esther. Version éthiopienne* (PO, 9.1), Turnhout: Brepols, 1982 (repr.)（エステル記）
- Id. (ed.), *O Livro do Profeta Amós e a sua versão etiópica*, Coimbra, 1917（アモス書）
- Id. (ed.), *Le troisième livre d'Ezrâ (Esdras et Néhémie canoniques). Version éthiopienne* (PO, 13.5), Turnhout: Brepols, 1988 (repr. of 1919)（エズラ記，ネヘミヤ記）
- Oscar Löfgren (ed.), *Die Äthiopische Übersetzung des Propheten Daniel*, Paris: P. Geuthner, 1927（ダニエル書）
- Id. (ed.), *Jona, Nahum, Habakuk, Zephanja, Haggai, Sacharja und Maleachi äthiopisch*, Uppsala: Almqvist & Wiksell, 1930（ヨナ書，ナホム書，ハバクク書，ゼファニヤ書，ゼカリヤ書，マラキ書）
- Hugh Craswall Gleave (ed.), *The Ethiopic version of the Song of Songs*, s.l., 1951（雅歌）
- Hans Ferdinand Fuhs (ed.), *Die äthiopische Übersetzung des Propheten Micha* (BBB, 28), Bonn: Hanstein, 1968（ミカ書）
- Id. (ed.), *Die äthiopische Übersetzung des Propheten Hosea* (BBB, 38), Bonn: Hanstein, 1971（ホセア書）

さらにもう１点，エチオピア語聖書に特有の論点を記しておかねばならない。すなわち，エチオピア語聖書はいわゆる旧約偽典との関連でも注目されることがある。というよりむしろ，聖書学者の視点からエチオピア語伝承が注目される場合には，もっぱら旧約偽典 ── より具体的にはエノク書やヨベル書といった文書 ── が焦点を成すとすら言ってよいかもしれない。これについてもディルマンの校訂があるが[69]，これら二文書はその後複数の学者（例えば外典偽典の研究で著名なＲ・Ｈ・チャールズなど）によって再校訂されるなどしたのち，今日ではそれぞれニブ[70]，ヴァンダーカーム[71] による校訂版が参照されることが多い。

言うまでもなく，これら偽典文書への注目度の高さは，もともとアラム語で書かれたと推測されるそれら文書が最初期のキリスト教（特にイエス・キリストをめぐる状況）をより良く理解するために重要な意義を有すると考えられる点によっており，したがってこれら書物の序論においてもそういった部分に多くの議論が割かれているが，本稿との関連で重要なのはむしろ，こ

---

[69] まずエノク書については A. Dillmann (ed.), *Liber Henoch Aethiopice, ad quinque codicum fidem editus cum variis lectionibus*, Lipsiae: F.C.G. Vogel, 1851. ディルマンは別に同書のドイツ語訳も出版している。A. Dillmann (transl.), *Das Buch Henoch*, Leipzig: F.C.W. Vogel, 1853.　次にヨベル書については A. Dillmann (ed.), *Maṣḥafa Kūfālē sive Liber Jubilaeorum ... aethiopice ad duorum librorum manuscriptorum fidem primum edidit*, Gottingae: F.G. Kaestner, 1859.

[70] Michael A. Knibb (in consultation with Edward Ullendorff), *The Ethiopic Book of Enoch. A New Edition in the Light of the Aramaic Dead Sea Fragments*, vol. 1: *Text and Apparatus*, vol. 2: *Introduction, Translation and Commentary*, Oxford: Clarendon Press, 1978. なお，ニブの本書で提示されているエノク書のエチオピア語本文はマンチェスター大学のライランヅ図書館所蔵の写本に収められている本文（の写真版）であり（他の写本との異読を記した異読一覧 apparatus criticus が収録されてはいるが），つまりニブのエチオピア語版は（Dillmann や Charles が刊行した校訂版と異なり）厳密な意味では校訂版と称しえない。

[71] James C. Vanderkam (ed.), *The Book of Jubilees. A Critical Text* (CSCO, 510), Lovanii: Peeters, 1989; Id. (transl.), *The Book of Jubilees* (CSCO, 511), Lovanii: Peeters, 1989.

れら文書の（現存する）エチオピア語版がいつどのようにして成立したかということである。この点については，まずエノク書についてはニブが，エチオピアへのキリスト教の浸透のあとしばらくした頃（四世紀）からアクスム時代の終わり（六世紀末）以前の間に他の旧新約聖書の諸文書と共にエチオピア語に翻訳されただろう，そして翻訳の際ギリシア語本文とアラム語本文が参照されただろう，と述べている[72]。次にヨベル書についてはヴァンダーカームが,「明らかにエチオピア語文学の早い段階でギリシア語から翻訳されたようである」と述べているが[73]，ヴァンダーカームのこの記述は成立年代の幅すら限定していないなど，あまりにもおざなりであり，上述した聖書学者の関心の方向（つまり，エチオピア語版自体への関心の欠如）が悪い意味で露呈していると言わざるをえない[74]。

---

[72] Knibb, *op. cit*., vol. 1, pp. 22, 46.

[73] Vanderkam, *op. cit*. (CSCO, 511), p. XVIII. 原文は次のとおり。“The book was apparently translated from Greek at an early stage in the development of Ethiopic literature and enjoyed canonical status in the Abyssinian Church.”

[74] 公平を期すると，ヴァンダーカームにはヨベル書の本文伝承などを専門に取り扱ったモノグラフがあるということは言っておかねばならない。James C. VanderKam, *Textual and Historical Studies in the Book of Jubilees* (Harvard Semitic Museum. Harvard Semitic Monographs, 14), Missoula, MT: Scholars Press, 1977. そして確かに同書６–７頁では,エチオピア語版がギリシア語から訳されたと考えられる論拠が簡潔に３つ列挙されているが，それらは仔細に見ると必ずしも充分な論拠とは言いがたい。

具体的に言うと，①「Several Greek words have been transliterated into the Ethiopic text」という主張との関連でヴァンダーカームは，ディルマンによる指摘の引用という形で *δρῦς*, *βάλανος*, *λίψ*, *σχῖνος*, *φάραγξ* といった語を列挙しているが，引用元のディルマンの論考（A. Dillmann, “Das Buch der Jubiläen oder die kleine Genesis”, *Jahrbücher der biblischen Wissenschaft* 3 (1850), p. 88）を見ると，これら列挙されている語の出典が明示されておらず，検証が困難である。この関連でヴァンダーカームはさらに，*ἡλίου* というギリシア語の転写がエチオピア語ヨベル書に見られるとするR・H・チャールズの議論（R.H. Charles (transl.), *The Book of Jubilees or the Little Genesis*, London: Adam & Charles Black, 1902, p. xxx）にも言及しているが，これにはすぐ後で言及する。

次に②「names normally appear in their Greek form」という主張との関連でヴァ

ンダーカームは，上記ディルマンの論文（p. 88, n. 1）を引き合いに出しているが，同箇所をそのまま引用すると次のとおりである。「man vergleiche nicht nur Gen. 18, 1 Mambrim; 20, 1 Géraron; 23, 2 Kiriath Arbok; sondern auch Aunan statt Aner Gen. 14, 24; weiter Gen. 15, 2 der sohn Mesek, meiner sklavin, jener Damaskus Elieser; Gen. 37, 17 Dutaim; 41, 45 Heliopolis; 46, 34 Gesem, u. a.」。ここで挙げられている典拠箇所はすべてギリシア語版旧約聖書の箇所表示であり，それら固有名詞が肝心のエチオピア語版ヨベル書の中でどのような形になっているかについての正確な典拠表示は見られない。なお，上で触れた ἡλίου というギリシア語に関するチャールズの議論は，ディルマンの論文のこの註（p. 88, n. 1）の議論に見られる「41, 45 Heliopolis」にかかわるものであり（この箇所は，Dillmann (ed.), *Liber Jubilaeorum*（註 69 を参照）では p. 123 l. 16 に，Vanderkam (ed.), *The Book of Jubilees*（註 71 を参照）では p. 188 l. 3（34 章 11 節）にそれぞれ見られる。また，上記 Charles (transl.), *The Book of Jubilees*, p. 204 の 34 章 11 節への註をも参照），エチオピア語自体の表現は ሀገረ፡ ኤሊዮ፡ である。だが，この表現（特に ኤሊዮ፡。カタカナで発音を書くとエーレーウ）が果たして ἡλίου からの転写だと言えるかどうか，より正確に言えばギリシア語 ἡλίου からの直接の転写だと言えるかどうかは極めて疑問である。

そして③「and, at several points, the extant texts must be retroverted into Greek to uncover the source of corruptions」という主張との関連でヴァンダーカームは再度，チャールズの議論（Charles (transl.), *The Book of Jubilees*, p. xxx）に言及しており，当のチャールズの議論自体は次のようになっている。「in i. 29, ii. 2, v. 4, xiv. 12, xxiii. 10, xxviii. 27, xxxii. 4, 27, 29, xlvii. 5 (see notes in loc.) we must retranslate into Greek before we can discover the source of the various corruptions」。しかしながら，この種の議論は，仮にチャールズの言うとおり本文の改変（corruptions）がギリシア語への遡及によって説明できるとしても，そこから直ちに，エチオピア語版がギリシア語からの翻訳であることの証明にはなりえない。というのは，仮にエチオピア語版が例えばシリア語版から，或いはアラビア語版から，訳された場合，その翻訳元たるシリア語版或いはアラビア語版の段階でギリシア語の誤釈が行なわれることも全くありうるからである。

なお，これまでの註で言及した文献の中で Ullendorff, *op. cit.*（註 68 を参照）は，特に第一章においてエチオピア語への聖書翻訳について種々論じているが，上述の内容（例えば，新約聖書の諸書の校訂版がここ半世紀の間にようやく出されるようになってきたこと）に鑑みると，聖書翻訳に関するアレンドルフの議論は研究の現状を反映したものと言いがたいため，本稿では紹介を差し控えることとした。

最後にエチオピア語訳聖書における正典の問題について。上でも引用した『エチオピア百科事典』の「聖書正典」（Bible canon）の項によれば，エチオピア正統テワヘド教会[75]には聖書のどの文書が正典を成すかについての公式的な立場はないとのことであり，この文脈で良く語られる 81 という数字は，事実上それだけの数の文書が含まれているという意味にすぎないようである[76]。よって同教会における聖書正典についてこれ以上詮索するのはあまり意味がないように思われる。ついでに記すと，いわゆるファラシャ（またはベータ・エスラエル，つまり，エチオピアのユダヤ人とみなされた人間集団）に属する人々は，もちろん新約聖書を拒絶しているが，他方で，エチオピアのキリスト教徒たちから受け継いだ旧約諸文書を含む聖書の刊本を受け入れており，しかもキリスト教徒たちが旧約聖書の最初の 8 書（いわゆる Octateuch）をオーリート（訳せば「法」或いは「トーラー」）と呼ぶのに対して，ファラシャの人々は旧約聖書（今言った意味での）の全体をオーリート（すなわち「トーラー」）と呼んでおり，そしてとりわけヨベル書が彼らの宗教生活にとって重要な役割を果たしているのだそうである[77]。

6．おわりに ── 聖書のアラビア語訳をめぐって ──

本稿では当初このほかにアラビア語訳聖書を扱うことを予定していた。アラビア語訳聖書を扱うことの意義は，上で見たようにエチオピア語訳聖書の本文伝承に対してアラビア語訳聖書が影響を及ぼしている可能性があることなどから，明白だと言えよう。

---

[75] テワヘドは訳せば「一性」ぐらいか。そこから転じて「正教」（orthodoxy）の意味に訳されることもある。

[76] Peter Brandt, art. “Bible canon”, in: S. Uhlig (ed.), *Encyclopaedia Aethiopica*, vol. 1, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2003, p. 571. 同箇所で引用されているエチオピア語キリスト教の研究者 R.W. Cowley の言葉を再引用しておくと，エチオピア教会では「正典性の観念は，他の大多数の教会におけるよりも緩い仕方で尊重されている」。

[77] Brandt, art. cit., p. 573.

しかしながら，種々考慮した末，アラビア語訳聖書への言及は見送ることとした。理由は，例によって筆者自身がアラビア語訳聖書をめぐる諸問題をこれまで立ち入って研究したことがないことがもちろん特記されねばならないが，それだけでなく，この問題に関して最近刊行された研究書と一応称しうるＳ・Ｈ・グリフィスのモノグラフ[78]を見るにつけ，アラビア語訳聖書をめぐる研究には重大な障害があるように筆者には見受けられ，そのため，仮に叙述をグリフィスの著書の紹介にとどめようとしても，紹介の際に一々不満を縷々述べねばならなくなり，その結果，叙述が長たらしくかつ非常に煩瑣になることが懸念されるからである。

そこで，ここでは今しがた述べた「重大な障害」や「不満」について短く記すにとどめることにする。このような言い方で筆者が念頭に置いているのは，実はキリスト教の聖典たる聖書をめぐる問題ではなく，イスラム教の聖典たるクルアーンをめぐる問題である。それがなぜアラビア語訳聖書の問題に関係してくるかと言えば，グリフィスによれば，アラビア語で書かれた最初の書物（つまり書物の形で初めてまとめられたアラビア語の文章）とはクルアーンであり，そしてクルアーンの成立がアラビア語聖書の成立への推進力をもたらしたとのことだからである[79]（なお，この点それ自体については筆者はグリフィスの議論に異を唱えるつもりはない）。つまり，アラビア語文書の成立の順番としては，クルアーンのほうが聖書よりも時間的に先だつということになる。

とすれば，アラビア語訳聖書の成立を考える上で重要となる次の問題は，クルアーンがアラビア語文書（書物）としてまとめられたのはいつか，ということになるが，私見によればこのあたりから，クルアーンをめぐる研究には重大な問題（或いは障害）が山積しているように思われてならないのである。すなわちまず管見の限りでは，これまでのところクルアーンの成立年代

---

[78] Sidney H. Griffith, *The Bible in Arabic. The Scriptures of the People of the Book in the Language of Islam*, Princeton: Princeton University Press, 2013.

[79] Griffith, *op. cit.*, p. 3 を参照。この点が，Griffith のこの著作の第 3 章の主たる論点となっている。

については伝説に由来する言辞が幅を利かせている。それは例えば次のようなものである。

> ヒジュラ歴[ママ]30年（西暦650年）頃，ムハンマドの死から18年ほど経った第3代正統カリフ・ウスマーンの治世下で，最初のクルアーン写本が完成した。この時初めてそれまでは口頭で伝達され流通していたクルアーンが，全文すべて文字で書き下された。1冊の簡素な書物の形で束ねられ，時のマディーナ政府が公定した原本となった。
>
> この写本の完成は，同時に政府主導の大がかりで苛烈な正典化事業を伴った。当時すでに西は北アフリカ，東は中央アジアにまで到達し広大な領域に広がりつつあったイスラーム圏全土において，この時成立したたった一つの原本を基準として，クルアーンの誦み方（音）と書き方（文字）が判定され，基準に合致しないものの廃止と焼却が命じられたのである。

伝説が伝えるこのような話に従って，学術的な論述においても往々，クルアーンは書物としては7世紀後半に成立していたとされてきている[80]。

そして，昔から良く知られておりグリフィスのモノグラフでも論じられているように，クルアーンには聖書やキリスト教に関する記述（暗示といったものも含む）が少なからず出てくる。クルアーンの中の言葉は基本的に預言者ムハンマド（或いは彼の生きた時代）と関係づけられる言葉だと考えられているので，そこで次に，ムハンマドはキリスト教とどのようなかかわりを

---

[80] 引用箇所は小杉泰・林佳世子編『イスラーム　書物の歴史』，名古屋大学出版会，2014年，66頁（第1部第4章　小杉麻李亜「写本クルアーンの世界」中の一文）。なお，同書については『オリエント』58.1（2015）82-86頁所収の拙評をも参照。引用箇所で踏まえられている伝説は他にも例えば佐藤次高編『イスラームの歴史1　イスラームの創始と展開』（宗教の世界史11），山川出版社，2010年，082頁でも（特に批判的吟味なしに）言及されており，そのような形の言及は数多く見られると思われる。言うまでもなく，この伝承は明らかに後代のものであり，学問的論述で言及される場合には当然批判的吟味が必要となるはずだが，管見の限りではこの伝承が（その信憑性等々）充分な批判的吟味に付されているようには到底見えない。

有したか，という問題が持ち上がる。しかし，如上述べ来たったところから明らかなように，ムハンマドの時代にアラビア語の聖書があるはずはないので，とすると彼は口伝でキリスト教に接したのではないかということになる。そしてそのようなキリスト教の種類として，シリア語キリスト教の諸派が挙げられたりする。実際，クルアーンの中に出てくる外国語の中ではシリア語（アラム語を含む）の割合が最も高いのである[81]。ところが，ムハンマドの時代のアラビアのキリスト教[82]の状況を探る際には，主要な資料となるのはやはりクルアーンそれ自体なのである。そうだとすれば，果たしてムハンマドがキリスト教との接点を有したのかどうか，また，ムハンマドがいったいどこからキリスト教に関する知識を得たかが，一層不透明になってくると言わざるをえない。

このあたりの諸問題の全体像を筆者は見通しえているわけでは全くないので，迂闊なことは言えず，この程度にとどめるほかないが，ともあれ，以上の記述からだけでも，ムハンマドとキリスト教とのかかわりをめぐる資料状況ないし研究状況がいかに混乱しているかは明らかだろうと思われる。

なぜこのようなことになるのか。筆者の想像の域を全く超え出ていない回答になるが，たぶんクルアーンの成立年代の設定に問題があるから，という

---

[81] Griffith, *op. cit.*, p. 20 では，クルアーンに見られる外国語の影響の 70％はシリア語（アラム語）に由来すると考えられるとする A. Mingana, “Syriac Influence on the Style of the Qur’ān”, *Bulletin of the John Rylands Library of Manchester* 11 (1927), pp. 77–98 の議論が紹介されている。

[82] ムハンマドの時代（或いはその直前）のアラビアのキリスト教に関する研究書としては J. Spencer Trimingham, *Christianity among the Arabs in Pre-Islamic Times*, London & New York: Longman, 1979; Alfred Havenith, *Les Arabes chrétiens nomades au temps de Mohammed* (Collection Cerfaux-Lefort, 7), Louvain-la-Neuve: Centre d’histoire des religions, 1988; Theresia Hainthaler, *Christliche Araber vor dem Islam. Verbreitung und konfessionelle Zugehörigkeit. Eine Hinführung* (Eastern Christian Studies, 7), Leuven: Peeters, 2007 があり，また，元来南アラビアの研究を専門としてきたフランス人研究者ロバン Christian Julien Robin がイスラム教成立前夜のアラビア半島の状況について精力的に研究を行なっている。但し，これら諸研究に基づいて当該キリスト教についての画像を描くことは別個の課題を成す。

のが答えなのではないかと想像される。つまり，クルアーンの成立年代が従来考えられているよりも遅い時期（例えば８世紀）であり，クルアーンの言葉の中にムハンマドの時代より以降のものがあってしかもそれがムハンマドに帰せられている，といった状況が想像可能なら，全体の辻褄は遙かに合いやすくなるのではないかと予想されるのである。

しかしながら，クルアーンの中でムハンマドの言葉とされるものが本当はムハンマドに由来しないかもしれないなどということは，口にすることすら今なお危険を伴う事柄なのではなかろうか。キリスト教の場合ですら，イエスの言葉（の少なくとも一部）についてその真正性に対する疑念をいだくことは，聖書学の歴史を顧みれば明白であるだろうように，決して容易でなかった。まして，キリスト教における聖書学が成し遂げたような達成（その功罪についてここで論じるつもりはないが）を，イスラム教におけるクルアーン学に期待することは，少なくとも現下の情勢では全く不可能である。私見によればここに，クルアーンをめぐる学問における重大な障害があり，そしてそれが，上に述べたような次第で，アラビア語訳聖書の成立をめぐる理解の進展にも困難をもたらしているように思われる。このような障害をどう克服するかの見通しもなしにアラビア語訳聖書（の最古の段階）について語ることは不可能だと言わざるをえない[83]。後日の論を期するほかない所以である。

[83] 無論，聖書のアラビア語訳は今問題にしている時代（７～８世紀）よりあとにも新たに行なわれているが，本稿が扱うのは「初期キリスト教と聖書翻訳」（つまり基本的に古代の聖書翻訳）であり，古い時代の翻訳を論じずに後代のもののみを扱うのは本稿の趣旨にそぐわない。